

a 学校教育目標	学びに向かい、心豊かで、健やかな児童の育成 ～「かしこく」「やさしく」「たくましく」～	b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】(自校の使命) 自分を愛し、夢を語る児童の育成 【ビジョン】(自校の将来像) 「通ってよかった」「通わせてよかった」と誇りに思われる学校
----------	--	----------------------	--

評価計画				自己評価					改善方針	学校関係者評価					
c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策	f 評価項目・指標	g 目標値	10月	2月	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方針	l 評価			m コメント	
					達成	達成					イ	ロ	ハ		
確かな学力	確かな学力の育成(かしこく)	○ものの見方・考え方の育成を図る本質的な問いの設定 ○思考力、表現力を高める児童コーディネート力向上「話型」の効果的活用 ○資質・能力と運動した「振り返り」の充実 ○ICTの効果的な活用を目指した授業改善 ○定期アンケート評価による成果と課題の把握、分析、改善策検討	○本質的な問いを設定した単元において、単元末の「振り返り」における児童のものの見方、考え方の見取りB評価以上の児童 ○児童が1単位時間の中で活躍する場を計画的に設けた研究授業の実践 ○1・2学期末に振り返りの交流実施 ○1・2学期末にICTの効果的な活用法の交流実施	7月80% 12月85% 2月90%	89.0%	94.1%	104.4%	A	本質的な問いを設定した単元において、単元末の「振り返り」における児童の見方、考え方の評価B以上の児童については、95%であった。問いを意図した単元構成を行ったことで、児童の見方・考え方の育成に繋がったと考えられる。 児童が1単位時間の中で活躍する場を計画的に設けた研究授業の実践については、授業者の自己評価の結果、87.5%であった。授業者がファシリテーターとして授業を進めることを意識し、児童の意見を引き出すことができるよう事前に授業展開をイメージしたり、考えを見取った上で指名計画を立てたりしながら授業を行ったが、目標値には届かなかった。1・2学期末に振り返りの交流、ICTの効果的な活用法の交流を行うことについては100%達成できた。(2月9日実施)	本質的な問いを設定した単元においては、授業者自身が単元を通して児童に身に付けさせたい力をより意識しながら授業に取り組んだことで、見方・考え方の育成につながったと考えられる。今後も研究授業において本質的な問いを設定し、児童の見方・考え方の育成を図っていく。 児童の見方・考え方の育成を図っていく。 授業者がファシリテーターとして児童の考えを引き出したり、繋げたりすることができるよう、事前に授業展開を想定しておき、児童の考えの見取りや評価を細かく行っていく。また、児童の学びをアンリテートすることを意識した研究授業の実践、研修などにより、具体的な姿をイメージできるようにしていく。 各学年でICTをどのように活用したのか、学習の振り返りを書くことができるようにどのような工夫をしたのかなどを、担任者会で共有し、学年末まで継続的に改善を図ることができるようにしていく。	5	0	0	・「問い」に着目し、授業づくりを進めていることは、今日的課題を的確にとらえた取組であり期待したい。 ・ICTを有効に活用した取組をしている。 ・算数科の思考力が課題であると分析しているが、どのように誤答分析を行い改善方法を立てたのかを明らかにしてほしい。 ・低学力層への重点的な取組とともに、今後も基礎学力の定着に向けしっかりと鍛えてほしい。 ・特に高学年では家庭学習の習慣の定着や効果的な学習方法の習得など、中学校に向けた指導をお願いしたい。	
	基礎学力の定着	○学力向上週間の計画的、効果的実施 ○計画的、効果的なドリルタイムの実施 ○家庭学習をやり切らせる指導とICT活用による家庭学習の実施 ○学力向上に向けた計画的、効果的な取組の実施及び個への支援手立てと授業改善策の検討 ○学力調査40ポイント以下の児童への手立ての充実	○単元末テスト「思考・判断・表現」のポイント 85%以上 ○NRT学力調査において、各学年、学力改善シートで提示した目標数値を達成した学級 ○全国学力調査において、学力改善シートで提示した目標数値を達成した児童の割合	85%以上	85%	—	100%	A	○単元末テスト「思考・判断・表現」の達成度については、国語科、算数科、理科の平均が85.6%であった。算数科のみの平均が79.1%であった。 ○NRT学力調査において目標値を達成した学級は85%(11/13)であった。国語科、算数科についての対策を昨年度から重点的に行ってきたため、全学年目標値を達成することができたと考えられる。 ○全国学力調査において目標値を達成した児童は45%であった。特に算数科の課題が大きかった。	○算数科の思考力の課題が大きいため、思考力の育成を目的とした授業改善を行っている。教師は発問を精選して児童に思考させるようにし、児童には、考えを言い、説明させたりする時間をとることに留意し、意見を尊重できるようにする。 ○来年度もNRTにおいて目標値を達成できるように、週3回のドリルタイムにおいて、課題の大きい領域を中心に対策を継続するとともに、本校で作成した類似テストを実施した後の解説、個別指導などを丁寧に行うことで児童に力をつけていく。 ○全国学力調査の結果を基に考えた授業改善を継続して行い、各学年の課題領域の学力を高めることができるようにする。	5	0	0		
豊かな心	ふるさとを愛する心身の育成	○一校一貢献をゴールとした生活科、総合的な学習の時間を中心とした「地域貢献活動」の効果的実施 ○学期毎に取組内容の効果の検証、改善策検討	○学校アンケート「小泉の地域が好きですか」肯定的評価4の児童の割合	85%	89.0%	92.0%	#####	A	○学校アンケート「小泉の地域が好きですか」の肯定的評価の児童は92%と、前回より3%増加した。 ○各学年、地域の小泉町の特産品を調べる学習や人材活用を積極的に進めていく、その成果と考えられる。 ○小泉町で作られている里芋など、具体的な特産品を紹介していくことで、小泉町が三原市の中でも欠かすことのできない大切な地域であるという意識付けを行うことができた。	○来年度以降も地域の人材活用を積極的に進めていくことで、具体的な体感に基づいた小泉町の素晴らしさを、児童が感じ取れるようにしていく。 ○4年生国語科「ふるさとの食を伝えよう」などの、地域のことを調べる学習において、より小泉町のことを調べたくなるような学習活動を行い、児童が自分から小泉町のことを知っていることとする態度を育成していく。 ○自然・産業・人材など、多面的に小泉町に着目し、特色ある小泉町を愛する心身を育成していく。	5	0	0	・地域で児童がよくあいさつをしている。 ・小泉小だからできることを生かして、今後も地域と共に取組をさらに進めてほしい。 ・地域での学びも徐々に復活している。今後も地域に誇りを持つよう期待する。 ・気になる児童への対応は、全教職員が協力しながら実践されると良い。 ・児童の課題については、教員が抱え込むのではなく、オープンにして組織で取り組んでほしい。 ・児童が「小泉の地域が好き」と回答した理由を分析し、取組との関わりを明確にしていきたい。	
	「小泉小5つの宝」の継承	○「小泉小5つの宝」(①ほかほか言葉②時間を守る③トイレのスリッパ揃え④気持ちのよいあいさつ⑤静かな廊下歩行)の児童による取組推進及び改善実施 ○ハイパー・QUや定期アンケートの評価による成果と課題把握、分析、改善策検討	○「小泉小5つの宝」のうち生徒指導部の設定した重点項目を用いた重点強化週間振り返りにおける児童の肯定的評価 ○ハイパー・QU (6月中旬、1月下旬)分析による学級生活満足度の割合で評価	85% 60%	96%	94.0%	110.5%	A	○重点項目の児童の肯定的評価は、それぞれ「気持ちの良いあいさつ」が95%、「ほかほか言葉を使う」が92%だった。 ○各学年で行った強化週間を行い、児童の意識を高めることができた。また、学級ごとに、よりあいさつがきり、ほかほか言葉を使ったりできるように取組を行うことで、さらなる定着と習慣づけを行うことができた。 ○数値は若干下がっているが、自分へ厳しい評価をしている児童もおり、あいさつやほかほか言葉に対して、より強い意識付けが行われた結果と考えられる。 ○第2回ハイパー・QUにおける学級生活満足度は72.2%と第1回よりも増加した。 ○言葉に不安や戸惑いを感じる児童に、より親身な指導を行った結果と考えられる。	○強化週間以外も学校の教員が一丸となって児童が意欲的にあいさつをしたり、ほかほか言葉を使ったりすることができるよう指導を継続して行っていく。 ○児童生活満足度の向上において、積極的に児童からの意見を募っていくことで、児童主体で「小泉小5つの宝」を守っていく意識を醸成していく。 ○学校生活満足度に届かなかった児童の原因を、多面的な視点から考え、指導を改善していく。また、新年度に向けて不安などはないか、児童への精神的な支援を行っていく。 ○気になる児童の課題は、生徒指導部を中心に、教員全体で共有し、どの教員も一貫した指導や支援が行っていくようにしていく。	5	0	0		
健やかな体	運動意欲の向上	○アンケートの結果分析による課題分析をし、取組内容の決定と実施 ○体育科における運動遊びの実施 ○休憩時間等を活用した学級遊びの取組実施	○運動やスポーツが好きな児童の割合 ○積極的に外遊びをする児童の割合	1学期80% 2学期85% 3学期90%	88%	87%	97%	B	○「運動やスポーツをすることが好きですか」の肯定的評価の児童の割合は87%であった。高学年を中心に、否定的な回答をする児童が多く見られる。運動遊び等を各学年で実施しているが、扱う内容や見方の工夫が必要ではないかと考えられる。 ○「積極的に外遊びをしている」の肯定的評価の児童の割合は85%だった。また、全く外遊びを行っていない児童の割合は、15%から8%となり、改善傾向が見られる。職員の働きかけや、学級遊び等の成果が出ていると考えられる。	○感染症対策を十分に考慮した上で、児童の健やかな体の育成、運動意欲の向上を目指す取組を進めていく。 ○体育科の授業の冒頭で運動遊びを継続して取り入れていくが、扱う内容を精選し、誰でも楽しく運動できる時間になるよう改善を進めていく。 ○児童が外で体を動かす、運動・スポーツに親しむことができる機会を確保するために、学級遊びの取組の継続や、保健体育委員を中心に、全校での取組を進めていく。 ○体育朝会の充実を図る。	5	0	0	・体育朝会を充実させ、年間を通してしっかりと体を動かす取組をしている。 ・感染防止をしながら、よく取り組んでいる。 ・体を動かすことの楽しさを児童に感じさせることにはよい。 ・高学年になると運動やスポーツを好きでなくなる理由の分析が必要である。	
	体をつくる	○食に対する感謝の気持ちを醸成する指導、取組実施 ○給食を食べ切る分量の自己決定と完食しようと努力する児童の育成	○栄養職員と養護教諭による栄養指導を各学年1回以上行う。 ○学校アンケート「給食は自分で決めた分量を食べていますか」の肯定的評価	100% 90%以上	0%	100%	100%	A	○食育指導を実施し、調理員さんの思いや、給食を作ってくれた人への感謝の気持ちが高まった。また、フランスよく食べる事の大切さを学習することで、苦手なものも頑張って食べようとする姿が見られた。 ○「完食の花」(はくばく給食週間)を実施した。苦手なものを食べる工夫を全校で交流したり、取組前に食育指導を行ったことで、完食しようとする意欲が高まった児童は93.5%だった。今年度の完食率は5→6%と高かったが、取組後は4.1%まで下がった。	○外部講師に指導をしていただくことで、興味を持って話を聞いたり、教えていただいたことを実践しようとする姿が見られたので、来年度も食育指導を継続していく。 ○保健体育委員会の子どもたちに、残菜を減らすアイデアを考えさせ学校全体の取組に活かすことにより、完食しようとする意欲が高まり、残食率も減少したため、今後の取り組みにも活かしていく。 ○栄養/フランスを考え、苦手なものも積極的に食べて、時間を意識して食べたり出来るよう今後も取り組んでいく。	5	0	0	・栄養教諭の指導によって、食物を大切に、残さず食べようという意欲が育っている。 ・一人ひとりの体調を考慮して、今後も計画的に食育を進めてほしい。 ・児童が自己決定した量を完食することは大切である。 ・児童が給食をどんな気持ちで食べているかを明らかにして、次年度の取組につなげてほしい。	
信頼される学校	活用する	○開発した地域の教材、施設の効果的活用 ①地域教材の活用と施設との交流(含リモート) ②ゲストティーチャーの招聘と活用(含リモート)	○地域、施設、人材の活用を、学期に1回以上した学年の割合	100%	66.7%	(4/6)	#####	#####	A	1・2年生は生活科の学習と関連付けながら、地域の児童民生委員さんたちと学ばせたり、幼稚園の園児さんと一緒に交流したりして、身近な人のよさに気付かせることができた。3年生は、三原特別支援学校の児童と交流会を開き、相手意識をもった活動の仕方の工夫をした。5年生は、地域のお寺の住職さんや農家の方との交流を通して、ふるさとのよさに気づき、保護者に発信した。 4年生は、水害について学んだことをもとに、地域に安全な避難所について知らせるチラシを作成し、地域回覧で回していただいた。6年生は、白滝園に行くことができなかったが、太鼓演奏をDVDにして届ける	コロナ禍で、地域の高齢者施設への見学ができなかったり、直接人と関わることができなかったりすることも多いが、今後も可能な限り、児童が体験を通してふるさとのよさに気付かせ、ふるさとを愛する心身を育てていく。 生活科や総合的な学習の時間のカリキュラムを見直し、児童が自分事として地域の課題を捉え、主体的に解決していくよう改善していく。	5	0	0	・今後も地域の協力を得て学校教育の充実を図ってほしい。今後も協力したい。 ・地域との交流はすばらしい。 ・6年生の小泉太鼓はすばらしいので、ぜひ継続してほしい。 ・教科指導と関連付け、進路につなげてほしい。
	発信する	○学校便りの定期的な発行とPTAを活用した地域への配付 ○学年便りや学年の教育活動の様子をHPアップ ○一校一貢献の取組の学期1回以上のHPアップ	○保護者アンケートにおける「学校は保護者の願いに応えた教育を行っていると思えますか」の肯定的評価	90%以上	95.8%	96.8%	#####	A	コロナ感染対策のために当分実施できていなかった。社会見学や、学習発表会等の行事を、感染対策をし、内容を工夫しながら2学期に実施した。保護者からは、「児童のよい思い出ができた」との声が届いた。また、一校一貢献の取組の様子を、HP/CIUP、学校便り等で周知した。このように取組を工夫することにより、否定的(全く)の回答は0になった。しかしまだ、3名の否定的回答がある。	日常的には学級担任が、児童の様子をきめ細かく見取り、気付いたことをタイミングを逃さずに保護者に連携していくことを継続する。一方で、担任以外の職員も進んで児童や保護者に声をかけ、児童や保護者の思いを分かち、学校全体で共有しながら課題の早期解決につなげていく。	5	0	0	・毎月「学校だより」を読ませてもらっている。学校の取り組みがよく分かる。今後とも情報発信に期待する。 ・今後も学校の「見える化」をしっかり実践してほしい。	
	組織の活性化と効果的な教育活動推進	○学校経営会議を核としたベクトルを揃えた取組実施 ○各部会(研究推進部、生徒指導部、保健体育部)における進捗管理とPDCAサイクルの活用による改善策の検討実施 ○担当者会における教職員の交流による取組の円滑な遂行 ○学校経営会議、三部会等を活用、教員の業務改善案を取り入れた業務改善の推進	○「効率的な働き方ができている」「児童と向き合う時間が確保できている」教職員の肯定的評価	100%	75%	50%	100%	91.7%	70.9%	C	教職員アンケートの結果、経験の浅い教諭を中心に、仕事の優先順位をつけることが難しかったため効率的な働き方ができないという回答が多かった。全体の半数の職員が、否定的な回答をしているという点で課題が大きい。子供と向き合う時間は、1名の職員が確保できていないと回答している。 4月～12月の9か月間で、全ての月において時間外勤務時間が45時間未満であった職員は、64.3% (9名/14名)であった。また、三原市教委規則に示されている「1年のうち1月における時間外在校等時間が45時間を超える月数6月以内」(12月まで4.5月)の目標達成した者は100%である。	経験の浅い教職員が見通しをもって業務に当たることができるよう、学校全体で相互に声掛けをし、風通しの良い職場づくりに努める。今後も、子供と向き合う時間の確保と、職員の休憩時間の確保に留意しながら、職員が健康でやりがいをもって働くことができる職場づくりに努める。	5	0	0

【j:自己評価 評価】
A:100≒(目標達成) B:80≦(ほぼ達成)<100
C:60≒(もう少し)<80 D:(できていない)<60

【l:学校関係者評価 評価】
イ:自己評価は適正である。ロ:自己評価は適正でない。
ハ:分からない。